かなへの原　地

特別
へ5
6148
2

存義評

十五点

杉ゟふ筆書くハ家兒さ掌
同しくハ判して都鄕へ御りよさ
知る人乃きおふまゝ有馬山
よれのうへりね織の胡さむミ

有佐評

十五点

酔狂ひ高ゝ御寺の御侍
七ッと六ッの貨りし横雲

平砌評

57-2541

十五点
国本丹合ふさふひの衣え
温石もまさ於まつ然唐の表
新草の産毛と撫て母と欺し
手前作りの酢て糖る俗

米仲評

十五点
温石り浄瑠理本と引裂て
うき时の業のかれや猫ふ眉
鍛り深くありを咲ふく
深かかりて母濃一婦

祇亟評

十五点
杉のふ頻扇の骨れ離よろく
酒呑めと名一月の表に似く

楼川評

十五点
下み篆息子も呑まの歳守まて
宿てしくみ伝はある玩具枕
猫の清とうふ程恒間又

買明評

十五点

菖露飾馬の明ん乃吹出よの
寝入る時ちらく見揺るおさな顔
かこはらぬ髷女の笑顔の哀く
紙の湯く彭と見える垢の抱起ひ
赤く咲ひらくも蓮ハはゆるさき

湖十評

擔声蕉

出女の残れ完うふ舟と見れ
戸わロで噺心の十二す
旋瑯沼所足きらぬとのさ里
辞伏せハ禿ゟ陰く足の裏

高川越泥と古きてさらねて
三粒降らくも京都の近さ

十六点

紫の戸や猫も淋しの花画ても
猫の子も人りなれぐ苦れ秋

十七点

傀儡師人形とても投頭巾
操らハ下の長いる山

萬國蕉

年ひとハよれ々睡る紀誉の春
立まと古くしらく　向拝社丹兄

旨原評

十五点

松ヶ根り竹の柱れ新酒廓

蕎丁八ころへぬけるも秋の暮

鰹盛りし藍彦惟子

紀逸評

十五点

剃鯖りりロの賑るも目出度て

吉原の売く売経る十二月

かうさり物怪とほ人又月夜

量ひとあり増るう母の飲ヶ串

本まつりま婦ー長生乃相

たのしさの空よし艶一本

再賀評

十五点

晩出しさぬつとあつけれ苗の市

一人ひとゑんの手とり風邪引

珠来評

十五点

枝のある枝突ひくまる鬼瓦頭

雨闇く青鷺ひかれ夜の松

夏人たと折かし酒くたすか

むくと起るや自然偶鱼ちやく
節過り痒くなり香くと採る
超雪評
十五点
掛りぬ女と巻れ大むかし
盆ゟなるをおもふ草の道
あしのまさる庄浅月代
雪吹濡れ角丁寿隅
秀儀評
十五点
温石りすると薦くる餅と焼

横腰りり節とむきんて法の夜
萬立評
十五点
蔓荻禿りたるむ夢此跡
鳴渡りありし杣の大声
吉門評
十五点
日本のやまと魂あん知利子
夕立や新のよふれる貸ぶし
思ひとれハよくるとのら糀う皇
母の立まの体むき合へ係の秋

弱竿て押わけ見れは岸柳

嘉廷評

十五点

風と無くゆれは瓶中の雨

屋根のなき舟も無りて濁田の春

封しめの主流るされ御師の状

秋の色乃吹りはけても足具那

梅鶴評

十五点

笑ふれて艶紙撰まれは桃節

起くり胸のふくまれ奈良の京

書永評

十五点

松高頃ハ蛞蝓も足もやき

書き分け捻て口と利く承代

鶏口評

十五点

鼻紙も飾へうさ包さみまゐ紀て

吹達の練余ふくま靡る丁の春

冬の杜丹や庄の宗子衣ん

清泉評

十五点

おかりひ扇の外の爪と歯
湿盤金や浮きゆきぬ無りぬけ

柳尾評

十五点

大百姓とゑへ於秀衡
百首よみおえ算乃殿原く
蚊り這入とり噌とりふ僧

庭臺評

十五点

燧餅り麺粂勢の紋虎し
ちりきれ薪の肉そゆうしき

由林評

十五点

級臺へ蝿のごとく了御道者
撥帯とどして芸ふ傾城

田社評

十五点

風や遊りの傳馬人と喰ふ
夏日よ八皆茶ミあ於女郎答
居酒屋の妻八ハに利ク百ふ島
横雲の二すし見ぇ遊れ恋る夏　畑
薫りらうけく鐘鎌見朱行

四大評
十五点
座敷くらき顔ふかふ春の風
晴天七日竹の鴬雛
泣く〳〵居まんと老乃くせ言

海如評
十五点
寒く蛇のうまれ大車油
馬の糞乃鼻毛の雨〳〵空

露牙評
十五点
所てハ浴ふ常りもぬ松の露
うと海しいとは母の口癖
かくしけるさり伊勢乞食かれ

春来評
十五点
挑燈の蕊りあると見て這入
らくろの夏虎咎来赤味噌
留守の出へ毋虎口ま似

右
扇裡

探ゝ鳥ゑし
芳井

かしけるのさり
伊勢ゑゆ好

扇裡

於寫字臺書

游戯二字
副筆意々
而完備

於梅月
寿信

秀色

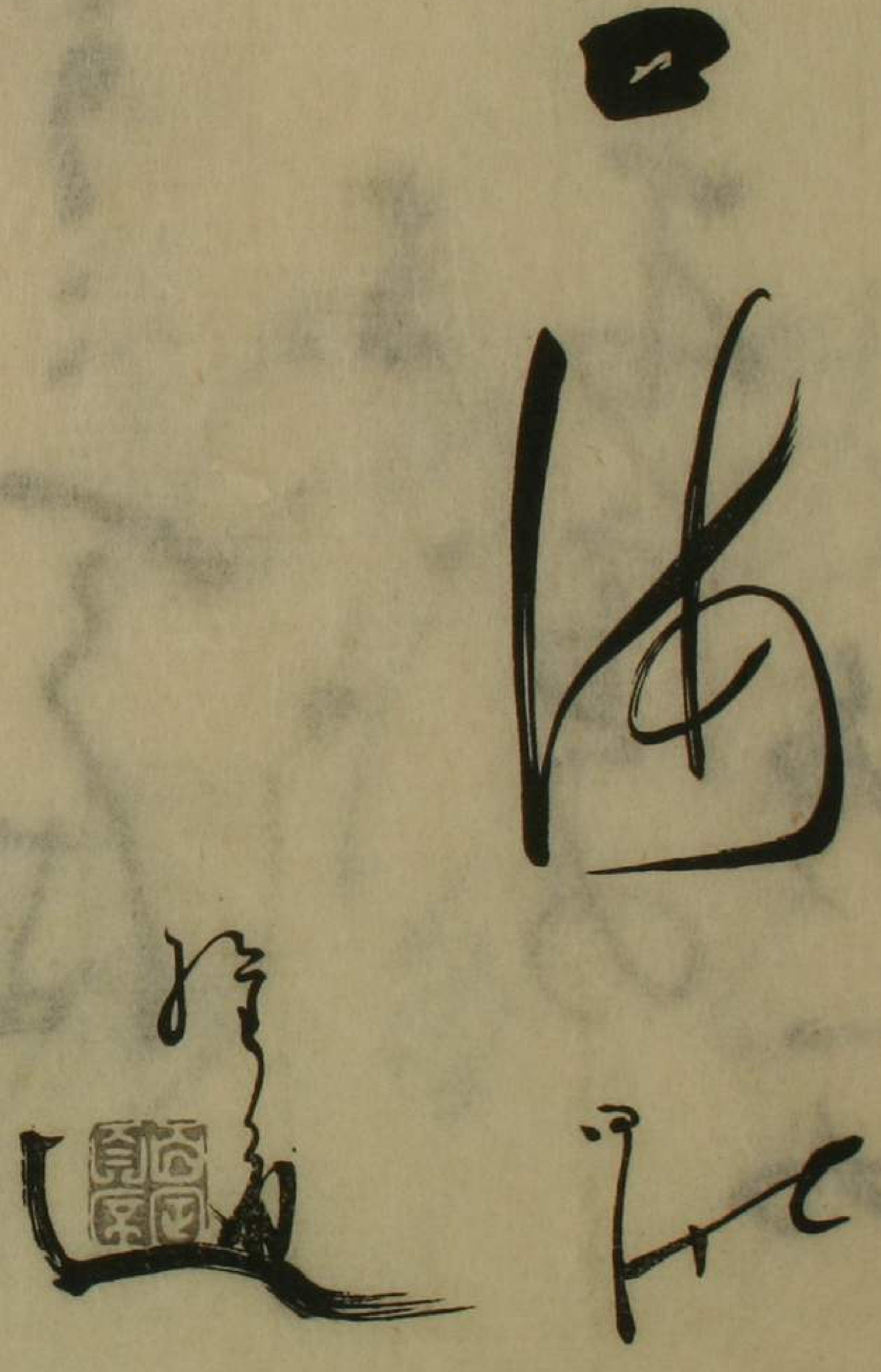
餘勇を
於ひ
あく
續く

扇裡

おちこち夕
あらし多
茶手砂

扇裡

りこ
一つは
第一好風
あいの
本信の
海へめ



扇裡

拂子そ大横ふのをすはつひ

扇裡

猫の極月

まひと云ふハ孫乃極月

扇裡

中将姫之御堂

之して白く

若菜

和也

婦々莫

卯月のおもひ

穎圭

扇裡

卯月の茄子夢比味する

石路之風中
賀曉

春の風
ゑつついめきた
嬉しく

扇裡

扇裡

青鷺もあと先に来る菖蒲かな

十八点

追 [illegible]

梅川

ゆふ雷はれて

今日の月

扇裡

明日迄売りかしつる今乃月

扇裡

炭や熊の
足して

天長地久

炭櫃の足手ハ熊のごとくまで

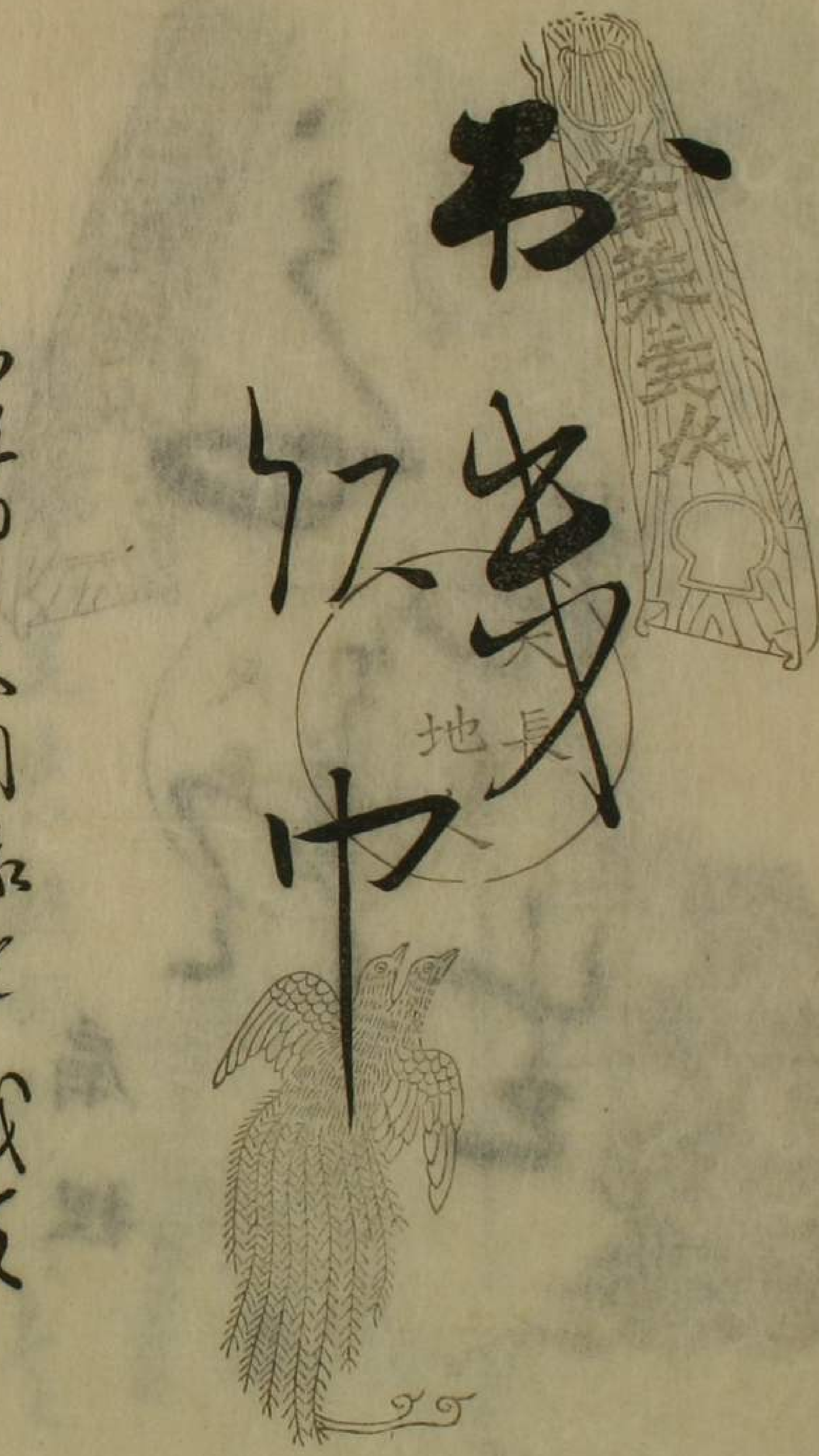
扇裡

ころもね
お生

天長地久

め房の着てんねるお生

お高祖巾



高祖巾大岡様と戯て

扇裡

六

味、露路ハ於
かし

半面美人画
花笑亭裡

何流にも露胡のめし

扇裡

かたつけり
はしに
君かよ

俳諧
もてあそひ

扇裡

ゑり〳〵御披立於大神宮

不[illegible]

[illegible]

信[illegible]

庭舎明月光

さらすゝ新地の

くらゝゝ

のまかこ

扇裡

笑顔
外四
一ッ件

夢の色音楽
めうおし江戸を

扇裡

妄千し江戸をみせる孫奈

個ふこゝろ
蝉つ深えしらゝ
天ゝゝ花に十ゝ二
虎写子七

桂華

うそ死つゝはの
うしろへりゆへ
つき

扇裡

雨囲山房書

涌集一句
未安箇中

萬庵

しら琴に
又かへるきゝしりめ
めりはりく羅

扇裡

まつ見一本

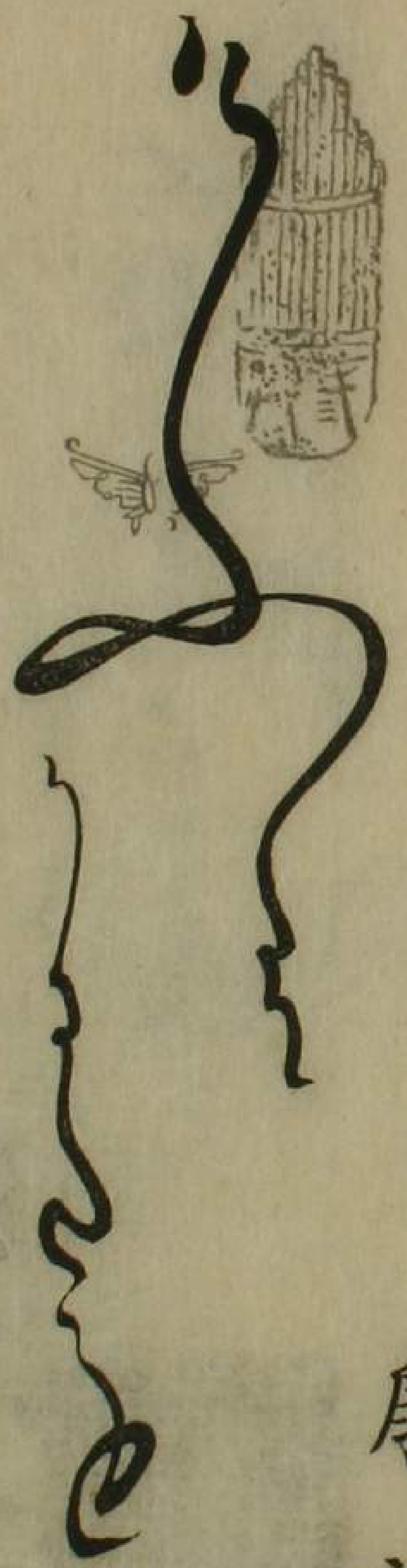
ていやう

扇裡

蓑ねなし

サ文仙

酒浄紙 朧月八室き蓑ね業



扇裡

今月八胃脾をゆゐ尾神変

淺きみの嵯
雁乃聲
状八道

ゆきのしや
はるめくくもし

扇裡

實採やつゝぬきくきの小豆餅

人えし里

扇裡

中将姫も

扇裡

玉霰砂
の影寒し

望嘉廷

くるとき夜ぞ
越君ふ美の
帰さ

扇裡

[illegible]

扇裡

[illegible]

[illegible]

[illegible]

扇裡

[illegible]

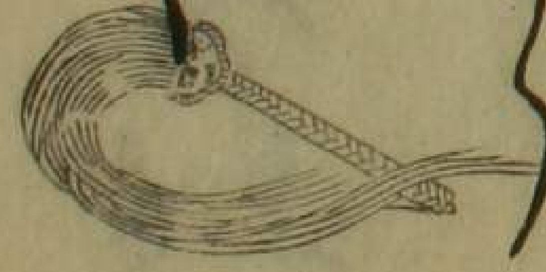
雛

[illegible]

扇裡

留洙硯石揚花影

[illegible]



歳春一月
露子毛十七
玉白賜之
三川居

うつ人
かしも
ゐ老を
為賀筆記

扇裡

ゝ春風も節
海老蔵
庵書

扇裡

しかも拍振乃
三絃にかめ

酒後自適

蓬莱山人

扇裡

木

白をよみては天て

筆てとるく

[illegible]

清水

梅かえに
立そふ軒の
この梅ゑ
鶯乃声

扇裡

扇裡

日ゝ新

圓大

扇裡

亜幽曉

ちほゆく

烏帽子まて迫付かへた旁れ中

古稀翁

海如

筆林かうつ川に生まれ

鯰の足

扇裡

山水わし

西崖書

鶏頭を女まし絵の

扇裡

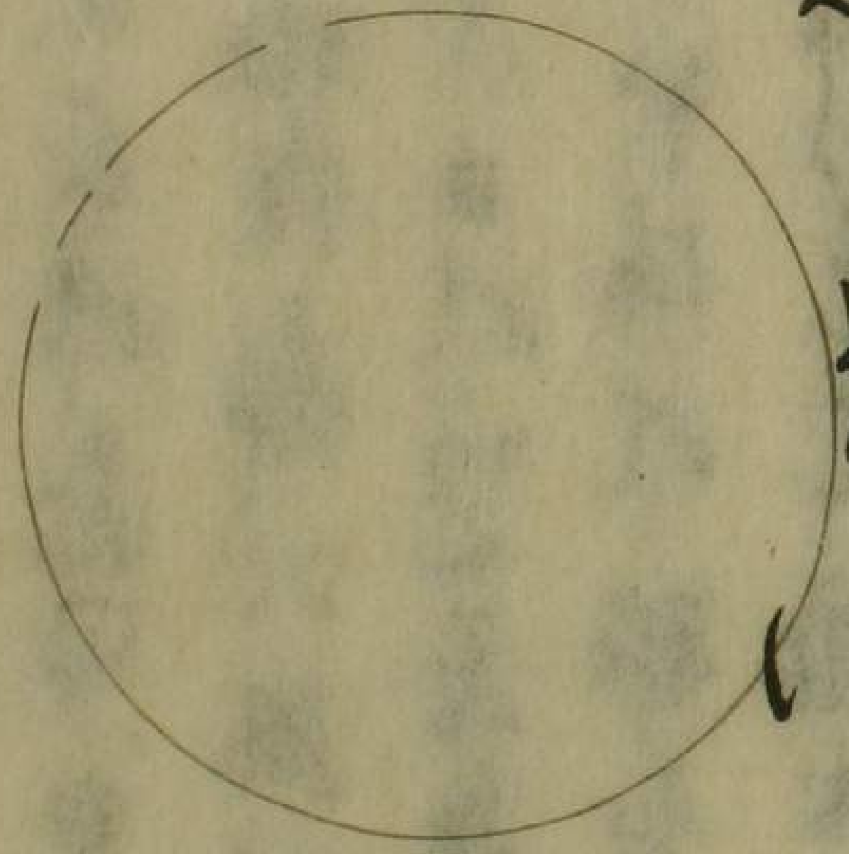
鶏頭を女まくられ床乃上

不山本

甲戌秋八月

以中得家

毋芸ぅ旨ハいぅ



扇裡

ゑやうなこの旨いゐ早苗とり

百員

会頭の心持されし扇かな　扇裡
新しき千代の花の白雲　吉門
舟の雨尓物換靡れ跡引て　湖十
草引る日れ行く羅廣ろ家　紀逸
人摘も組如保れ脚をとふ　珠来
的紙借りまえ雛も来る　柳尾
残る月星乃間へ追ひさまよ　田社
ある雪と落る艸の葉乃露　執毫

こざゆくハ様れ声も棹の歌　門
庵紙覚活て琵琶を弾ふ　裡
猫三つ枝と出しさ里鐘紙おし　逸
憂藤花枕石をとおふふ　十
泣せんと静尓さ自帷幄錦　尾
独ふら燈ッ洒れおとろへ　来
書うれ障子へ仁書く雪おれ　社
矢一ッ来こゐ追りかし紙　門
笠瓶へおちる座敷と持歩り　裡

ヲ

呑ぬる川ちやる夏の夜の雲　逸

後の世の爲り法寺乃藏建て　十

湯ともなら寸尓佐渡ふ出鐘　尾

賦詠し此詩尓たわされし花の日　来

盃洗ふ岸の春風　社

九龍りし此か着り八畳へ　逸

京乃女房達神も佛も　裡

白丁乃枯っぬけると寂しけれ　尾

年御季寿九雪中の雲　十

一二夜わふかい幕の戸庇　社

さぞまとりハ義ひ見える　来

雲頭羅風の葉も蓋そりし　門

山ふ此とかさぬます夏　逸

美人色見程の切っ鼻尓出く　十

足もと鰐りまさる鐘音　尾

雪しりうしてとめらの寫の箱　来

木樨の香乃盈ふ究竟　社

青山常ききも来き身此頃　裡

陰を縦横く有明のむく鳥　門
嵯峨よりも又那ヶ命ハ恥のうち　尾
肘枕曲くハたよけなる世や　来
出泥く融の臭もなくなる里　社
何なる億年さい院氏附人　十
似者ある出く清盛貢軍　門
出鵜に蠅の總ふ初冬　裡
本倉乃居るくハ湯鴨ハ端近き　逸
咲ヶ止なしと拗の咄る月　尾

膝抱だ座るに仰り秋の風　裡
あ紙お案山子に浮なさるん　来
錬所の子れ盲ハ望うさなりけり　十
鐘節かく栽木の上　社
餞別にた大盃紙を募れしく　門
小手さし原も顔折草　逸
猟人れ雉子れ丸ほくおりさハ　裡
肌ある役と目のさなる縞　尾
切かえ指着くさんく紙への世　逸

最后のたゆ陳家中の賀　十
人ならし三寸ハ雁に斤風枕の奥　来
乃る梢は入梅とそくし出　門
織布ハ五尺餘く芙蓉乳　社
童のうちハ陰と又陰に　裡
きのふくふ時雨の中の袂に墨　逆
樋ゆくしこゝに合る大竹　尾
それとも謡てやよりど（淀）名残　門
解毒丹に乱　艪の音　社

ウ

昼間とも切のふ見月に酒狂人　十
角力まけて瑞山　嵐山　来
名新に披身の絵馬の珍しき　社
連くて退てしお別の口　門
生実乃日次半日ハ髪うろち　尾
夏の柳乃香ひ吹やう　逆
表とまる飛鳥井様と志すめ　来
児ハむかし紙幟て立　十
蛙の住庭なから池の月　裡

大松打かける礫礦漉の桶　社
鬼貫ハ黙り按摩ハ身をまかせて　門
清水にさえぬ拂斎南の綿　逸
堀井戸と稲荷ハ長り記念之　十
花もおろかり似た梅の雪　尾
晩乃骨諢をまとの手訓艸　来
御所とまたす恋病る猫　裡
内侍佛りよんなむの一つ老　十
怖く聴く金天の菓子　門

暁とさふ喧嘩都清の仮名売　尾
積紙の押したゆりかさんと　来
貧しくてないの粥焚く川千鳥　裡
明石の殿に読く法蓮寺　社
村雲に指の動く角の御　逸
足丸子きり熊の狸樅れん　十
氏素性代くよりれ扇まさ持　門
庫裏切ふくと味噌搗の唄　逸
夏ゑんめ裾かへる枯る也葵　社

掠りとりも添むくむの蛩　裡
唐人の月とい字ハなくなめて　来
多なん杉ふしくも筆の隠逸　尾
されたの病うき匂ふ露時雨　裡
川中島て牛ふなくれる　門
ちんの木の薪と成るそめてたれれ　十
額をとぬるぐ朔日なふし　来
你母ふなく子の年もおつ沫か　尾
薑をあられハ光白い飯　社

苑藁うき裏屋くも民の門　逸
嘯る鳥の声も君之　筆

跋

三君のむつミ更の交
みかしさあらう人に
今雪月花風流の
宴を催して四神
の飾りを具の備え

匂ひハ玉欄にかゝやき
照ゝ金閣にうつろふ紙
庭上に燎せる設仕の
掌釈勤の族数かる
井に満しあり其徳
筆此重をしるす

やまとかなへの集とや
奉るものえ
金城東岩代楼ニ
風窓湖十

吉田魚川